

〔翻刻〕 飯富雅介師所蔵『高安流仕舞附(天・地・人)』(二)

飯塚 恵理人

先号に続き、「地」冊の六五曲を翻刻する。凡例等は全て前号と同じである。

(表紙)

高安流仕舞附 地

(目録)

鞍馬天狗	一	・龍田	一	当麻	二	源氏供養	三
西行櫻	四	定家	五	東北	六	夕顔	七
采女	七	佛原	八	松風	八	胡蝶	九
舍利	十	・鶴	十一	土車	十一	雨月	十二
藤永	十三	・鉢木	十五	花月	十六	阿漕	十七
錦木	十七	木賊	十八	鶺鴒	十九	石橋	十九
大曾	二十	・車僧	二十	・殺生石	二一	恒政	二二
是界	二二	・熊野	二三	・雲雀山	二五	・蟻通	二六
班女	二八	鉄輪	二九	大原御幸	卅	蟬丸	三二
花形見	三三	草紙洗	三四	・巻絹	三五	小督	三六
富士太鼓	三六	天鼓	三六	二人静	三七	住吉詣	三八

・羽衣	三九	吉野静	四十	放下僧	四一	・柏崎	四二
・清恒	四三	望月	四四	烏帽子折	四五	雲林院	四五
項羽	四六	安宅	四七	東岸居士	四八	唐舟	四九
竹雪	四九	・自然居士	五十	俊寛	五二	籠太鼓	五三
景清	五四	百萬	五五	哥占	五六	山婆	五六
・海人	五七						

(66) 《鞍馬天狗》

出立、小格子水衣(白・紫の外何ニテモ)。大口、角帽子(大横様緞子)。(素袍上下、放髪、脇連二人。)連四人。(或ハ六人)始め大夫名乗、太鼓座に寛ク。狂言出、云云の内に、子方三四人先ニ立、階掛に立並ふ。狂言文を持来、脇に渡す。少左へ披き、立ながら受取。尤左の手にて正面をうけ、文を披。「何々」と謡。「ちりも始す」と言終て、文をうちへ式ツに折、左に持。「美面白き」と謡。「木陰にてこそ」と狂言に会釈。「花咲ハ」と文を巻、「手折、しほり」と座に行。子方5段々次第に並、下ニ居。諷済、狂言呼出、廻賦有。「皆／＼御立候へ」と子方に向。沙那王壺人残、其外ハ次第々立入。後別義なし。

(67) 《龍田》

出立、慰斗目・着流・角帽子・水衣・珠数・扇子(墨絵)。尤僧脇続く時ハ大口(小格子)をも可着。始め作物大小の前に出有。次第・名乗・道行、常の如し。連に立向所六尺斗。着廻賦有。「此川を渡り」と連に向、答て座ニ行。大夫呼掛ると其儘向答。連ハ下ニ居。「川の面でも」と正面を(角掛)見。「ゆるさせ給へ」と【正面へ披き】(本文絶置。太夫ニ向、「此方へ御入り候へ」と作物の方へ)、一足出。大夫謡と向。「此方へ御入候へ」と作物の方へ(三)足出。「扱ハ是成か龍田の明神」と作物を見。「是ハ御神木にて」と太夫に向。「けふは又此御神」と作物を見。「和光の影」と二足出。中腰にて「我等を」と合掌す。「殊更に」と手を下し、打切に下ニ居。脇正面角掛居ル。「いざ宮廻り」と太夫会釈時見立。静に踏廻り、座ニ行。(○)「見る程に」と足ヲ留メ、踏廻り、太夫ニ向。「ふしきやな」と(老足)太夫に向。「我は誠ハ此神の」(○)「龍田姫は我也」ト老足後に引。「給ひけり」ト下ニ居。と下ニ居。中人迄可見。廻賦相掛り也。(但今ハ常の通り也。)待謡居ながら謡。後「御殿しきり」と作物を見。クリより離し、「尤去程に」と見。神樂不見。「久堅の」と見。切まで別義なし。

(68) 《当麻》

出立、同前。尤僧脇続ク時、或ハ切の能の時ハ大口可着。次第・名乗・道行前ニ同ジ。連に立向所九尺斗。廻賦答済、座ニ行、下ニ居。大夫出、「たま〜此」と見。返しに立、一足出、問答。「先あれに」と角掛、「是成寺」と正面見。連謡時は応答。「又是に見へたる」と脇

(12)

正面を見。「是もゆへある」と太夫に向。「色はへて」の打切に下ニ居。但轉前廻賦有時ハ、廻賦云終て下ニ居。中人迄見。狂言呼出。廻賦有。間の謡、居ながら謡。後大夫出、「いたゞきまつれ」と経を渡す。二三足出、中腰にて可受取。尤太夫出ると其儘見。直ニ正面ニ出、角掛、中腰にて披く。左を上可読。「十声も一声」と二ツに折、両手にていたゞき、左に持、座へ行、下ニ居。巻懷中ス。舞不見。「後夜の鐘の音」と見。切迄後別義なし。(但ワキ斗扇子ヲ指、珠数ヲ右ニ持也。)

(69) 《源氏供養》

出立、小格子。(或ハ白綾。)水衣。(紫紅萌黄)。角帽子(大横様緞子、或ハ金銀欄着スモ有。)大口・水晶の珠数、金扇子。檀紙三枚つぎ合、経の如ク巻、懷中ス。次第・名乗同前。位第一也。道行「鳩の海」と正面へ出、踏留り、幽延し、立戻り、連に向。「たつこそ水の烟りなれ」と又左へ見渡し、座ニ行。尤連に立向所九尺斗。大夫呼掛ると其儘見、問答。連は直ニ座ス。「はつかしや」の打切に下ニ居。中人迄可見。廻賦なし。大小かゝると連にしらせ有て立。座より老間斗、正面より四尺斗出、正面に向座し、連は脇より三尺斗さがり、脇の左右ニ座ス。「扱石山」と謡。うたい済立、本の座に帰る。後大夫出、「名もむらさきの色に」と見。問答。「イロエニ」離す。差聲を見。「心中の所願」と扇子を差し、檀紙を取出し、左に持立。三足斗出、角掛下ニ居。右にて披き見る。尤左の方を少し上て可持。「覚樹の花ちりぬ」と打切て二つに折、左に持立。座に行、下ニ居。巻て懷中ス。「狂言綺語をふり捨て」と太夫を見。「能々物を」と角掛。後別義なし。(但秘傳数多有。)

(70) 《西行櫻》

出立、小格子、着流。水衣〔黒茶の類〕。角帽子。〔小横様〕。墨絵の扇子。珠数。始大夫作物に入。大小の前に出有。脇出様、〔口伝有シナリ〕座ニ行、床机に掛居る。狂言口明有。次第打出ス。連脇出立、素袍上下。慰斗目。少サ刀。鎮メ扇持、例の通二段ニて出。三人〔或ハ四人・五人迄〕。名乗、道行心可有。随分花やかなるべし〔ハわるし〕。廻賦言。答済、末の連より右へ廻り、橋掛に行。一の松の本にて案内乞。狂言云云済、左へ披き、橋掛のうらの方へ寛ク。尤中脇也。但正面に真うしろを不可見。脇差聲謡出ス。済と狂言来云云有。応答へし。言畢て、又脇正面に離し、「凡洛陽」と言。「此山陰迄」と静に狂言に会釈。「あの柴垣」と階掛を見。「内へ入候へ」と狂言に会釈。狂言立と離す。狂言〔来ルト一同ニ立〕。連と云云有。連右へ披き立出^(ネ)出。狂言〔サラく〕ト云。調子〔口傳アリ〕。「桜花咲にけらしな」と謡。【うたい「さらりく」と】〔山のかひより〕と二・三足作り物ノ方へ行。〔作物ヲ静ニ可見。ワキ諷時正面ニ向。見付柱ノ先ニ行、ワキト向合也。舞台に入、太鼓の前通り、〔貴賤群集いろく〕〕「此木の本に」と台端より六尺斗。尤脇の方に向ひ、但「桜花咲にけらしな」と作物を見、謡事も習ひ也。脇ハ離シたるまゝにて、「我ハ又心」と謡。「貴賤群集」と静に連の方を見。初同打切に、連あしらい、其儘下ニ居る。脇ハ「実や捨て」と離し、謡済、連ニ向、「面々此山陰」と謡。「少し心の外」と少シ角掛て、哥を吟する。地謡「あたら桜の」と云時、〔静ニ立、脇座ニ行ク。角カケ、下ニ居ル。〕作物を見、「家路わすれ」と連に応答。〔静ニ床机ヲ放シ、二三足出、男ト向合、下ニ居ル。〕「今宵ハ」と床机を離ス。一足出、下ニ居。連

も同じく立、脇の次に竝居。大夫謡出すと静に作物の方を可見。尤其儘にて、問答轉⁵不見。「あら名残」と見。舞不見。「春の夜」と見。「夢ハ覺にけり」と放す。後別義なし。

(71) 《定家》

出立、慰斗目着流シ。水衣。角帽子〔緞子〕。珠数。扇子。連二人同前。次第・名乗・道行、常の如シ〔口伝多し〕。始作物大小の前ニ出有。連に立向所、《江口》の如し。廻賦「夕へかな」と上を見。「是成」と左へ披き、「晴らさばや」と連に向ひ、答済、座に行、大夫呼掛ると其儘見。問答。「実く是成額」と正面脇座の上を見。「扱⁶はいか成」と太夫に向い、初同打切放し、大夫「けふハ思ふ日」と見。「御供申へし」と作物の方へ三四足出。大夫「喃く」と言時作物を可見。「扱⁶はいか成人」と大夫に会釈。「猶々語りまいらせ」と二足斗引、下ニ居る。大夫句当可有。居曲舞常の如シ。廻賦。狂言より掛ル。間の謡居ながら。後大夫「昔は松風」と謡時見。「是見給へ」と立。二足斗出、下ニ居謡。「仏平等」と合掌し、大夫「御覽せよ」と手を卸す。「悉皆成仏の氣を得ぬは」と立。本の座ニ行、下ニ居。舞不見〔口伝有。〕五段目、地頭より切迄見。後別義なし。

(72) 《東北》

出立・次第・名乗・道行、同前。連に〔立〕向所七尺斗。尤半着。廻賦。連答済、入替り、階掛、太鼓の前通りにて狂言廻賦過。台端真中四尺斗有。差詞言。「あら面白」ト謡ながら座ニ行。大夫呼掛、会釈同前。「又あの方丈」と正面角掛、「御やすみ所にて」と大夫に向問

答。初同打切にて下二居、中人迄見。廻賦、狂言より掛。間の謡例の如し。後大夫出、台に入と見、轉りより放す。会釈由断あるべからず。舞迄見。切迄後別義なし。

(73) 《夕顔》

出立、同前。名乗所、大鼓右の手通り、名乗足三足。連は階掛に中腰にて居。脇答拝し、一足引、差聲謡ながら、連に立向所六尺斗。道行し、「尋ね問ひてそ」と連に入替り、して柱より三尺斗有て謡濟、幕の方を見「ふしぎやな」と謡。「休らハはや」と謡過、座二行、下二居。大夫出、「真如の月も」と見。返しに立、耆足出、問答。轉に其儘下二居。中人迄見る。廻賦同前。間の謡如例。後大夫出、台に入と見、居ながら問答。舞不見。「お僧の今の」と見。終りまで後別義なし。

(74) 《采女》

出立、名乗所同前。但角帽子縫をも可着。連に立向所も同前。尤本着也。廻賦答等濟、座二行、座ス。大夫出、小謡中の打切に見、返しに立、耆足出、問答。「此山に住給へハ」と正面真中を高く見上る。「扱菩提樹」と右へ静かに見廻【事】(す)。大夫「此方へ御入」と脇正面角掛、二三足出。「御経をよミ仏事を」と大夫に向、「吾妹ワキモか」の打切にて下二居。中人迄見る。廻賦同前。待謡其儘。尤大小掛ると謡也。後樂長出、台二入と見、居ながら問答。轉り離す。舞不見。(○)本文ニ、過ると見。切迄。「月になけ」と見。切迄後別義なし。

(75) 《佛原》

出立同前。角帽子縫をも可着。次第・名乗・道行始めの如く。尤本着也。連に立向所六尺斗。廻賦。「是成草堂」と脇座を見、「一夜を」と連へ向、答濟、座二行。大夫呼掛ると、其儘向、一足出、問答。連ハ下二居。初同打切にて下二居。轉のまへ廻賦有。句当可有。中人迄見。廻賦、狂言より掛る。間の謡。大小掛ると居ながら謡。後大夫台に入と見。問答。舞不見。「獨猶」と見。切迄後別義なし。

(76) 《松風》〔京かゝりにハ次第なし。なき流にさすへし。〕

老人僧。出立同前。但角帽子縫不可着。始、作物台端真中に出有。次第二段にて出、太鼓座の前通りにて、仕手柱より五尺斗出、踏留、幽延し、左へ廻り、大鼓右の膝を真中に見、二・三足寄、打切て謡。地返のうちに名乗足【名乗】。答拝し一足引、廻賦有。「又是成」と作物を見。「尋はや」と踏廻り、階掛り、して柱より耆尺(余)手前にて、狂言呼出し云云有。踏廻り、作物の前、四尺斗【の】(手)前に、踏留。差聲謡。「実秋の日」と其儘にて正面高く見上。すら／＼と脇座の上々まで見廻し、「今夜ハ」と脇座を見。「明なほ。(○あの)」と少右の方を見。「行はや」と本の座の方を見行、下二居。大夫出、「汐路かなや」と拍子耆ツ踏と見、床机に掛る。間放し、樂長連下二居ると立、一足出、「塩屋の主じ」と言畢て連の方に向。「いかに此」と言。「主じに其由申候らわん」と又離す。連「其由申て」と向。問答。大夫「暫ク」と言畢て、脇靜に放す。「さらバ此方へ」と又連に向。「かうまいり」と大夫の方へ三・四足出、下二居。問答。「誠やあの」と作物を見。「逆縁ながら」と靜に大夫に向。「能見て候や」と謡。

「二人共ニ名を」と連にも会釈。又大夫を見て居る。「恋草」の打切に（立。）座に戻り、下ニ居。大夫に向。曲舞不見。「三瀬川」と見。舞不見。はの舞（と）も（に）同断。「いなばの山」と見。（「松に吹来る」と見。）「帰る波」と放す。後別義なし。

(77) 《胡蝶》

出立・次第・名乗・同前。道行、大小打掛謡出ス。「霞むそなたや」と右へ披き、「茂き梢」と道行し、「弘き御影」と踏留、幽延し、「花の都」と本着也。尤大鼓右の膝をあてに付也。着足・着廻賦有。「又是に」と正面真中を見。「御車寄」と脇座の方、上を見、「立寄詠めはや」と座に行。大夫呼掛ると其儘見。問答。初同打切にて着足引、座ス。中人まで可見。廻賦、相掛り也。待諷例の如シ。後大夫出、台ニ入と見。居ながら問答。舞不見。「四季折く」と見。はの舞不見。「春夏秋と言」より切迄見る。後別義無し。（口伝有。）

(78) 《舍利》

出立・次第・名乗・道行、同前。始作物台端真中に出有。廻賦済、左へ披き、踏廻、階掛りの方へ行、《松風》に同シ。狂言云云済、作物の前三尺斗手前に下ニ居。差聲謡。「一心頂札」と合掌す。地に取と手をおろし、「拝する事のあらたさよ」の打切に左へ披き、しつかに立、座に行、座ス。大夫出不見。「聲す也。いか成」と見る。尤居ながら問答。曲舞済迄見。「ふしきやな今迄」と角掛謡。「猶此舍利」と大夫を見。中人迄。廻賦狂言と掛る。後別義なし。

(79) 《鶴》

出立・次第・名乗・道行・廻賦（過）、太鼓座の前にて狂言呼出【し候】（ス）迄、同前也。「是非に不及」と踏廻り、座の方へ二・三足靜に行、狂言呼掛ると、きうに向、立戻り、「あの堂ハ方々に」と又踏廻り、靜に座ニ行、下ニ居。（口傳多し。）大夫出、「忍ひはつべき」と居ながら見。問答。中人迄見、返しに離ス。廻賦。間の謡例の如し。角掛（珠数カケズ）合掌し、「一佛成道」と謡出ス。済て手をおろす。脇正面に向、後大夫出台に入と見、其儘立、（珠数ヲカケ）合掌し、「一佛成道」と謡。「五十二類」と手を下し、下ニ居。問答。「則御悩」の打切にて放し、「時鳥」と見。切迄後別義なし。（但待諷の後、聲合打事モアリ。兩様也。）

(80) 《土車》

出立同前。但笠を着出る。次第始の如シ。地返しの内、名乗足。尤笠をぬき名乗。答拝し、一足引ながら、（サシヲ諷。打切ニ笠ヲ着ル。）笠を着ながら、差聲謡。道行同前。但本着也。着足の内に笠をぬき、廻賦済、座ニ行、下ニ居。右の方に笠を置ク。尤紐を手まへに出して置。太夫出不見。「聲をあけて呼へとも」と見。「打捨てくるまの」の返しに角掛立出、笠右ニ持提、一足出言（○可諷。「古郷ニ」と子方ヲ見○。「又此方成ハ」と太夫を見。「や」と角掛、「あら何ともなの事を思ひて候や」と言。「誠に」と笠を着。「南無阿弥」と靜に大夫・子方の前を通り、太鼓座ニ寛く。曲舞迄。「二人ハ手に手」と階掛一の松の本に出。脇正面角掛、「心つよく」と諷。「又引返す」と笠ぬき提、「追て行」と台に入る。「身をなけん」と言時（「あゝ」と）笠を

捨、はしり寄、太夫・子方の【袖】(肩)を両手にて取る。「葉末の露」とあとへ三(・四)足引。「又父に」となく。但左の手なり。「又もや父にわかれなん」の打切にて子方を先に立入。又爰にて座三行、下二居もする也。句当次第なり。

(81) 《雨月》(但脇能ニ有時大口着用の事)

出立、次第・名乗・道行・笠のさばき同前。但小格子可着。始め作物、脇座(を)あけ、次に出有。尤大夫連姥入居、本着也。着足。差詞言。「釣殿」と脇座の方を見。「立寄」と左へ披き、踏廻り、太鼓座ニ寛く。大夫「夫さへあるに」と立左へ静に踏廻り、仕手柱より一間斗出、作物の方へ向、問答(但出様アリ)。太夫「お通り候へ」と言時、正面に向、「去ながら」と言時又むかい、「其理り」と正面に披き、「月わもれ」と謡。三人にて謡時、太夫に向、「此方へ入せ給へや」との打切にて、作物の上に行、座ス。笠(ハ)うしろに置。大夫に向。中入。上可見。廻賦。構なし。後大夫出、「あらへれ出し」と見。舞不見。「有難の影向」と見。終迄後別義なし。

(82) 《藤永》

出立・次第・名乗・道行・笠のさばき同前。但小格子不可着。始子方・連脇出。素袍上下・少サ刀・扇子・文(證文ナリ)懷中す。初の地謡前に、角掛て居る。子方ハ連脇の上に居。尤脇座明ヶ置べし。着廻賦済、右へ披き、角掛、二足斗出。座の方を見、案内を乞。連謡と見、問答。「いぶせき小屋のちり拂」と、(扇開事も有)連角掛言。「十府の」と見合、入替り、座三行、下二居。連ハ大小の前に正面向、

(三)

下二居。但五尺斗前也。脇ハ笠を右の方に例の如ク置。尤連の方を見ながら居。「扱いつの世」と少し角掛、「一樹の陰」と連ニ向、問答。「又是に」と子方を見。「貴所の」と連を見。連「さあらハ」と右の手にて文を取出し、左に持(持様アリ)来り、中腰にて渡す。左にて取角掛、右の手にて開き、誂。「や」と離し、文を二ツに折て、「加程迄」と連に向問答。「御ふしん尤」と言ながら文(を)巻(キ)、右ニ持、「預り置て」と懷中ス。連「あれにて候」と脇正面角掛見る。脇も同前。「又今日ハ浦遊」と向合。詞済、笠を提、太鼓座より大小後ろに入。次に子方・連同前。但連ハ切戸ハ入。太夫出、後曲舞上端にて笠を着、笛のうしろより静に出、左に扇を披き持。珠数も持也。尤顔を隠す。座ニ立。子方も次に立。狂言「我等もお供申さん」と下二居と、右の手にて二ツ招ク。狂言自分の鼻の先にゆひをさすと、一ツうなづくと、狂言来云云有。太夫の方へ行時は離す。来ると可見。「うて」と言〇(〇と言)ながら放す。太夫台に入と見。羯鞞より不見。「差扇【を】〇(〇と)大夫来ると見、扇を拂と扇を捨、右の手にて笠を向へ取、捨ながら一足出、謡。「我が様の姿」と脇正面を見。「汝か様成」と樂長を見。「いかに月若」と子方を見。「今日より芦屋の庄七百」と文を右の手にて出。「月若知行」と子に渡し、「又藤永は」と大夫を見。「よし／＼慈悲ハ」と角掛、「汝か本知行」と大夫に向。「下知をくわへけり。」と一足出。「頓て本宅に」と放し、下二居。又子方の次にも有。

(83) 《鉢の木》

出立、其外同前。(始)連女笛の上に出居。《藤永》の如ク案内を

乞。「御かへり迄待申さう」と太鼓座に寛ク。太夫出、連女と問答有。
「扱其修行者」と（笠を持）左へ披き立。もとの所ニ出。「我等か事に
て」と言。「よしなき人を」と右へ披き、太鼓座に行。下に居、笠着、
階掛へ静に行。（尤）長短に寄。但太夫「喃／＼」と呼掛る時迄に行、
立留り（居）、少角掛る也。太夫来り、袖をとると其儘見、笠を取、
右に提、「実事も旅の宿」と座に行、下ニ居。笠を右に置、「夫ハ雨の
木陰」と大夫に（向）。連女と問答の内不見。大夫「いかに申候」と
見、問答。「先冬木」より放す。「きりくべて」と大夫来と見。静に問
答。「扱いづくにか」と角掛高く見。「何国に宿を」と大夫に向。「名
残りハ」と笠ヲ取り、「暇申て」と立。静に「さらばよ」と大夫の前
を通り、太鼓前通り、して柱より五尺斗先に出。「自然鎌倉」と、立
歸り（耄足出）大夫を見、「けうかる法師」と正面に向。「公方の縁」
と大夫に向、「御沙汰」と左の手にて、指、（耄足出）右へ披きしほり
ながら入、（仕手柱の方へ式足出。左足ヲ引、「ヨシムラン」シタル。
返シ（ヨシ）ニ右ヲ引、シタル。「ナリ」ニ静ニ左ヨリ入ル。）、仕手
柱の例にて手をおろす。後一聲不越。出立、「金欄・角帽子」沙門、
小格子・紫衣・大口・少サ刀掛落（金扇子・珠数・水晶）・文懷中
（習イ有）。二階堂出立、扱烏帽子・平礼（左折）・白鉢巻・色有厚板・
袖無・大口・小サ刀・扇指・太刀持。脇ハ座に床机に掛る。二階堂ハ
地の前にて、下ニ居。太刀ハ後口に置。二階堂、直垂上下・ソデナ
シモ。連四・五人モ出ル有。扇子を持、角掛居る。大夫出、「追掛た
り。」と二階堂に云云有。二階堂手をさけ答済、膝たてなをし、階掛
の方へ一足出。狂言呼出し云云済。一足引座ス。大夫来りて御前にか
しこまると見、謡。「又当參の」と（脇正面ニ向）角掛、「返しあとふ

る」と見。「又何寄いて」と脇正面に離。「いつの世に」と見。（イデ
其時」ト放、「有しよな」トアシライ）「其返報に」と放し、「合せて」
と見、懷中より文を取出し左に持、「按裾に取詠」と投渡す。（手渡ニ
てもよろしく、習有也。）「扱国／＼の」と離す。後別義なし。（脇、
白アヤ・色ナシ・小横様、唐織・厚板モ用ル。【十二字分薄判読不
可】舞衣、長絹の類ヒヒ【二字墨消】常ノ□□スル時ハにて、クワヲ
并珠数ナシ。花の帽子ニても□□はよろしからず。）

(84) 《花月》

出立・次第・名乗・道行、同前。但笠不着。廻賦言、踏廻り、階掛、
太鼓の前にて狂言呼出し云云有。踏廻り、座ニ行、下ニ居。大夫出不
見。「朽木の柳はミとり」と見る。謡済、角掛立。「是成花月」と謡。
大夫を見、「やあいかに」と言。大夫カツコ付る内、狂言来云云有。
畢て放し、下ニ居。「今と此さゝら」と立。「あれ成御僧」と入。尤羯
鼓済と可見。又不入に其儘居事も有。句当次第也。後別義なし。

(85) 《阿漕》

出立・次第・名乗・道行同前。着廻賦済、座ニ行、下ニ居。太夫出
「浮世の業」と見。立一足出、問答。詠歌の所離し謡。太夫謡と見。
樂長下ニ居る時、脇も座ス。「海面くらく」と少左へ披く。中入迄廻
賦。狂言より掛る。間の謡、大小掛り、居ながら謡。例のことし。後
大夫出、「猶執心のあみをかん」と見。朔中ヨリ不見。「只罪をのミ」
と見。終迄。但僧脇つゝく時は男にもす。素袍上下。別義なし。

(86) 《錦木》

出立・次第・名乗・道行、同前。始作物大小の前に出ス。本着也。廻賦済、座ニ行、下ニ居る。〔但獨り脇続キ、又六十以上ハ、連二人連テモ〕不苦。太夫出、〔細布の色こそ〕と見、返しに立、一足出、問答。連女へ会釈勿論也。〔実や名のミ〕と離し、〔やとりにいさや〕と見。廻賦済、下ニ居。但大夫立ながら語る時は、脇も同前。〔あふいでく〕と大夫立時、脇も可立。大夫の方へ一足出。〔彼岡に〕と離し、大夫應答言合可有。〔習有。〕〔紅葉は染て〕と作物【を見】(の方へ)、一足出、返しに一足引、下ニ居放。廻賦例の如シ。待謡同じ。後〔いかにお僧〕と連女を可見。大夫謡と見。尤連女脇の上に来り、〔きりはたり〕の返しに放ス。差聲より可見。〔去程におもひの〕と離。舞過て見。〔野中の〕と作物を見。後別義無し。〔喜多、けふの細道〕さそひ也。《田村》のグワイ也。

(87) 《木賊》

出立同前。子方を先に立出る。立向所六尺斗。次第二段、幽延し、立戻り、名乗。〔又是成〕と〔左り方〕子方を見。〔只今御供申〕と披き、答拝済、道行本着なく廻賦【二字薄判読不可】。子方〔に会釈。子方〕座に行、下ニ居。脇も次ニ居ル〔但金剛流相手の時ハ、連僧老人出ス。口傳有〕。大夫出、〔身をたゝ思へ〕と見、返しに立、一足出問答。〔さん候あれ成を〕と、樂長角掛、見る時、脇も可見。〔草に似たる〕と大夫に向、〔古き事の〕と言ながら放し、詠歌謡。〔ありとハ見へて〕と大夫に向。〔互に〕と角掛、一二足出。〔あのはゝ木ゝ〕と会釈。〔実や道ある〕と放し、太夫〔いかに〕と云時見。〔何国迄も〕

(二四)

と踏廻り、座ニ【行】(戻り)、下ニ居。して連來、問答少し有。畢て放ス。大夫來ルと見、〔御さかづきを〕と放す。子方謡と應答。〔しらぬよしにて御入候え〕と云。〔金剛ハ、此所ニ連僧詞有。〕大夫又來ると見。〔一つきこし召れよ〕と酌する時、脇扇子をひらき、うくる。轉より放す。大夫應答心付べし。上端より見、舞放し、〔子をおもふ身ハ老鶴〕と見。切、子方無構。〔可習。〕但縫角帽子可着。

(88) 《鵜飼》

出立・名乗所《杜若》に同じ。連僧老人也。角帽子縫ハ不用。答拝し、一足引、差聲謡ながら〔鎌倉山〕と立向所六尺斗。道行例の如く、廻賦済、狂言云云ハ《鵜》の如し。連ハ地謡の前に行、立居。脇來座ス時、二・三足寄、下に居。大夫出、〔是に往來の〕と見。尤居ながら也。連僧〔あの鵜つかい〕と見。〔あの岩落〕と角掛、〔一夜せつし〕と脇に向。〔喃其【時の】(御)僧にて〕言時、大夫を可見。大夫寛きの間、脇も(連も)放す。大夫〔すでに〕と脇斗可見。中入迄。廻賦常の如し。間の謡、立一足出、うとふ。連も同前。〔浪間に〕と両僧ながら角掛、下ニ居。謡畢て放す。後大夫出、〔千里の外も〕と見。〔喜多「一僧一宿」ニアシライ有。〕切迄後別義なし。

(89) 《石橋》

出立、金襴角帽子・沙門白綾(或ハ小格子)・大口・水衣(紫或ハ浅黄)掛落・腰帶金入・珠数(水晶)・金扇子。名乗所真中少右。答拝し、一足引、〔是ハはや〕と言。〔其橋を渡らはや〕と座に行、下ニ居。大夫出、小謡中の打切に見、返しに立、一足出、問答。〔身命を〕

と扇を指。殊数を右に（取）直シ、「橋を渡らばや」と正面真中へ角掛、一二足出。大夫「暫ク」と留り、大夫を見、問答。「御覧候へ」と又始メの如く角掛見渡す。「おぼろけの」と後に一・二足引、大夫に向座ス。扇をぬき可持。中人迄見。狂言無構。後不見。（口傳有。）

(90) 《大會》〔緋の衣、六十以上可着。是ヲ一目晴ト言。〕

出立同前。尤小格子・水衣。緋をも用ゆ。囃子方・地謡迄座定^{マツ}る出ル。脇座床机ニ掛る。其後謡出ス。「一佛乗の峯」と正面角掛、「風常楽」と静に離す。大夫出、「人の音するハ」と見。問答。「さあらばあれに」と角掛、「能々御覧」と大夫に向。中人迄。返しに離す。狂言無構。復大夫出不見。「両脇をひらき」と角掛、「釈迦如来」と大夫を見。太鼓打返し、「僧正此時」と言。「信心をおこし」と立、三足出、中腰にて「一心に」と合掌し、「俄に大嶺と」手を下シ、立戻り、下ニ居。後不見。

(91) 《車僧》

出立、小格子・大口・緞子角帽子・沙門水衣〔紫【非】（緋）の外可用〕掛落・珠数〔水晶〕・金扇子。次第例の如し。作物出。尤脇座に有。（車也。）次第謡、地返しの内、着足の如くし、正面向。道行常の如くし。（ソラモ程ナク。）白妙と。（廻る日の）踏留、幽延し、右へ見廻し、座ニ行、車に乗。尤前より（本文後よりとアレ共前より）乗ル。（口伝アリ。）床机ニ掛。角掛、（脇正面ニ向。）廻賦言畢ると大夫呼掛る。其儘見。問答。中人に離。狂言無構。但驚流にては、脇の右の方に来、櫓^{コソツ}る。其時は扇子にて会釈有。（有習。）後大夫出、「い

さ車僧」と見。問答。「あら面白の」と離ス。「あふ事を」と見。「路地の白牛^{ジヒヤゴ}」と角掛、「拂子^{ヒヤゴ}を上げて」と右の手を上る。（口伝アリ。）「小車」と見。切迄後別義なし。

(92) 《殺生石》

出立・次第同前。但珠数ハ常の也。（【字四字分薄く有…珠数無用】か？）始作物大小の前ニ出ス。狂言柱杖をかたげ、付き出る也。名乗道行例の如く。廻賦（イソキ候）の事）の内、狂言詞有。其儘右へ抜き、階掛を見、狂言と云云有。座に行、大夫呼掛ると其儘見。問答。轉前廻賦云。下ニ居。中人迄。狂言掛ル。「さあらハ柱杖」と言畢て、太鼓座^カ持来るうちに扇子を指、柱杖請取様〔有習〕。持様〔同〕。立、作物の方五六足出、能見、謡出ス。句論立を見て小鼓打掛る。「今生かくの」と一・二足出、ひとへ身にて作物を柱杖少し横様にして、「されく」と二つ前より向へうつ〔有習〕。其儘捨、（一足引）珠数を掛、「自今以後」と中腰にて合掌す。珠数はすらず。立戻り、本座ニ行、下ニ居。「二つにわるれば」と太夫を見、「頓て五鉢」と離す。「猶執心」と言より切迄可見。後別義なし。

(93) 《経政》

出立同前。但沙門にあらず。水衣〔紫緋不用〕・珠数〔水晶〕。狂言口明有事も有。常はなし。有時ハ習数多有。出様《大會》の如し。但名乗所常の通り。済、座ニ行、床机に掛、差聲謡。大夫出不見。「夜の灯」と可見。問答。初同過放し、「ふしきやな経政」と言。「扱も我」と大夫〔二向〕（立時見）。「されはかの経政」の打切にて放す。

「ふしきやはれたる」と角掛、少し高く見、「時の調子」と大夫に向。
「あれ御覧せよ」と大夫の見る所を可見。「大けんハ」と放す。「先に
見へたる」と見。「灯を吹消して」と離す。後別義なし。

(94) 《是界》

出立《大曾》に同じ。珠数〔平形〕・連僧式人。大口也。中入後、
車の作物、脇座ニ出有。尤初めの連居、程あけ置へし。大夫後見に案
内可有。後口より乗。前より下り、一聲一段にて出、立並ひ謡出。
「角て」と角掛、「山河草木」と右へ静に見廻し、幕の方を見、「こハ
そも」と離し、床机にかくる。太夫出、「あら物くし」と見。「ふし
きや雲の」と扇子を指。珠数を右に持〔但輪ニシテ〕。朔り不見。留
に脇を見、走り来る。太鼓打上に不構。「聴我せつ者」と謡。尤珠数
を掛、大夫に【少し】(おし)あて合掌す。「うんたら」と折る。「其
時御聲」と手を畢、床机に掛ル。扇子ヲ持、珠数を左にとり、尤はづ
す「ケ程に妙成」と見。切まで。尤連は、脇床机に掛ると下ニ居。後
別義なし。

(95) 《熊野》

出立、風折〔紫紐〕・唐織・単狩衣・大口・腰帶〔縫紋〕色入・金扇
子。脇連、素袍上下・のしめ〔但段〕・少サ刀指。太刀持、扇子差。
脇名乗所台真中少右〔真中〕。名乗足五足。尤笛常にハ替べく。答拝
なし。位第一也。「いかに誰か有」と左に披き、踏廻り、連を見。連
ハして柱のきわより三尺斗上に出る。尤中腰、手を下ける。詞済、座
ニ行、床机に掛る。連は地謡の前行、下ニ居、後ろに太刀置く。扇

(天)

子持、角掛、大夫「いかに」と其儘にて立。謡ながら太夫ニ向、問答
済、右の足より脇に向、中腰にて手を下ケ、「言葉で」と言畢て膝立
直シ〔立〕。大夫に向【立】、「此方へ」と言畢て〔大夫〕脇に向。問
答。但連ハ角掛、下ニ居、脇大夫を見。「さあらハ諸共」と床机を離
レ、大夫の持たる文を立ながら左にて取。(大夫下ニ居ならバ下ニ居
て取ル也。)台真中端より五尺斗後にて少し角掛、下ニ居。△(△扇
持ナリニ右ノ手ヲソヘ。)文ヲひらき、○(○見込「カン」ト謡出し、
「ナリ」ト謡。)左の方を上ケ、●(●右ヲ下ゲ)謡。(一句一ト下り
の事。)[「返すく」と見、返す。【此歌」と〕(歌同前也。[書留む]
の打切ニテ)文を二つに折。▲(▲「そも此歌の」打切ニ立、静ニ)左
に持。〔打切ニテ〕座へ行、床机に掛る。ふミハ巻、二つに折、袂に
入。(脇座ニ捨置テモヨシ。)[左也。口傳色々アリ。][「今ハか様に」
と大夫を見。(候はん)ヲキ聞、「老母」ト謡。)[「牛飼車」と連に廻
賦有。放し居。連ハ扇子を指。太刀持、中腰にて角掛、脇は大夫「は
や御出」と向、少し右へ披き立。三四足出、正面に向。作物とならび
〔習有。〕(大夫ヨリ少し後付方ヨロシ。)[連ハ脇ハ五尺斗後に立。(馬
とゞめ、左・右・左・右・右。脇座ノ方へ直シ、静ニ座ニ行、下ニ居
ル。)[「爰より花車」と足遣有。座に行、下ニ居。(此間口傳有)連も
同前。始めの如く、大夫謡済、連ニ向、詞有。(但上掛りハ、太夫謡
兵文もして斗。)[詞済放し、大夫仕手柱の上、五・六尺に来る程に、
連詞可有。尤立、詞畢て元の如く下ニ居。大夫「あら面白」と云と見。
問答。「実や思ひ」と離し、(サシヲ見。曲も立トハツス。)[「一つきこ
し召れ」と向。舞〔不見〕。初段の打込を放し、五段目、地頭より可
見。「あらにくの」と角掛、後はづし居る。(謡ははづし居ル。)[短尺

の段、短冊持来と其儘見取。「上下相違無。ミ様第一也。」正面角掛、「短尺左ニ持。」「取上見れば」と扇子を（持ナリニ）下ニ置。左の手にて上を持。右の手にて下を取そへる。一トくたりなり。（一トクダリ見テ、「実ニ」ト大夫ニ向。）「馴し東」と大夫に向、「只此儘に御暇」と放す。後別義なし。「金剛相手の時、短冊の留、其外ならいあり。」（金剛、短冊扇ニ乗セ来ル也。）

(96) 《雲雀山》

出立同前。弓矢持。連三人出立同前。始の連、太刀持也。初作物、脇座に出有。連脇男出立、右の如く。名乗所太鼓の前通り、三・四尺出、二足引云云。答拝し、左へ披き、踏廻り、階掛へ行。太夫を呼出詞畢て、階掛裏を通り、幕入。大夫中入にて、次第二段にて脇出る。連に立向所九尺斗。名乗答拝無し。差聲直ニ謡。尤左へ披き、踏廻り、「興をます」と立向。「梓の真弓」⁵連謡。「扱又月」と道行。「あまの川」と踏留。「空にぞ」と上を見。（半着。正面ニ其儘向。）謡落と、「いかに誰か有」と言。連に向。連、中腰にて答有。左廻り、作物の次に行。弓矢を捨、扇を持、右へ披き、少角掛、床机に掛る。太刀持ハ連二人の次に居。太刀（本文ニ持ハ）置様、例の如く後口に（太刀を）置。扇を持、角掛居。大夫出、「花橋や召さるゝ」と立。忝足出、問答。脇ハ無構。「色くくの」と放し、「春霞」と下ニ居。（但此間ニ、廻賦無キモ有。）曲舞の「長余所目に成て」と脇始て大夫を可見。舞不見。「いさや婦しん」と見ながら、「やあ」と可謡。「中々諸天」と角掛、「有へき」と見。「さらハ此方へ」と立。二・三足出。「そこともしらぬ」と脇正面角掛出、台端より七尺斗ヲ。「三つのかねにて四

鳥の樹^{ネグサ}」と作物を見、下ニ居。「只なくのミ」と両（片）手にてシラル。「実や世の中」と正面に向、「夢ならは」と大夫に向。大夫、大小の前也。「はやとくく」と左の手にて指す。大夫、子方を連に立と、脇も立。入替り、大小の前へ行。大夫の跡に付、太鼓の前通り、して柱より五尺斗先へ行、踏留。見送り「奈良の都」と正面に向、扇子をひらき、「咲返る」と幽玄の扇ニツ遣い、脇正面に離し、留の拍子二つ可踏。扇たゝみ入る。始の如く、次第に入。「又御輿に乗セ」と子方に付入も有。句当次第也。後別義なし。

(97) 《蟻通》

出立同前。但弓矢ハ不持。連三人。始の連太刀持。是又同前。立向所九尺斗。「暮渡る空」と踏留、幽延し、「里ちかけなる」と脇座に行。右へ踏廻り、正面角掛、一足出。謡「俄に日暮」と上を見、「しかも乗たる」と下を見。後へ（忝足）引、平座し、「前後をばふじ」と顔を上。（「ともしび」と諷出。）「足をも引ず」と下を見。「あら笑止や」と顔を直す。（アシライノ内、足ヲ直ス。）大夫出、「よし／＼御灯」と（より会釈。）中腰に成、膝立直し、大夫を見、立。一足出ながら「喃く」と謡。「此森の内」と正面を見。「実ニも姿は」と大夫を見。「たつ雲透に」と正面始の所を見、一足出。「角ともしらで」（観世ワ「社檀（飯塚注・原本四字分空白。）ぞ」と会釈）と、其儘にて（初同。留ニ）下ニ居。（一足出ル。「実も」四五足後へ引、下ニ居、頭手ヲ下ル。「恐れさるこそ」ヒザヲ直し、してト問答也。）大夫「御身ハ」と（見）。問答。「念願し」と放し、角掛、謡。大夫「面白し」と言時見。「中にも貰之」と角掛（脇正面ニ直ス）。「直なる道」と会釈。「かゝる

きとくに」と謡ながら、(観世ワして謡。)中腰に成り、正面角掛、「月毛の」と下を見。「関の清水」と下ヲ見。)右の手を出し、御づなを取引立る。其身も立、「ふしきやな」と手を卸し、「本の如ク」(角掛、七・八足出。「元の如く歩ミ」と次第に階掛の方へ見送り(三四足出。))、「越鳥南枝」と脇正面角掛(沓足出。))「胡馬北風」と又階掛の方を見(沓足出。))「哥に和らく」と右へ披き、(後へ三四足引)左りへ踏廻り、正面へ(二三足)出。一(・二)足引、中腰に成、両手を下、礼ヲす。膝立替直し、大夫を見。「客人にて」と言。(其儘下ニ居)。又左へ立直し立、座に行、下に居。大夫「いでく」と謡を見。色笛不見。「和光同塵」と向。「あれハ夫か」(《野守》ノ足。「立チ隠れあれハ」、はし掛「□□へ笛□□」)と立、階掛り、して柱の影にて見失ひ、(足。))「貫之も」と正面に向。柱より五・六尺出。角掛(正面ヲ見)、踏留。(後へ沓足行角掛。))「夜は明て」と上を見、左へ開き、扇を披。幽玄の扇二つ有。後別義なし。(扇納メ留ヲ拍子のる)。前のことし。

〔立足ヅカイ、「アレワソレカ」ト次第二詰メ、仕手柱ノ先ニ行、足ヅカイシテ、「貫之モ」正面ニ直ス。七八足出、踏止メ、少シ幽エン。心持後へ、右△左△△△△。角カケ下ヲ見、上ヲ見ル也。「夜は明ケテ」足ヲ寄セ、左ニ一ツ踏廻り、「旅立」正面ニ向。是ハナクテモヨシ。左ニ披き、右△左△。此時扇を披キ、右ニ披キ、左△右△。幽玄ニツ。角掛、拍子ニツ在。〕

(98) 《班女》

出立、長絹(の上)、厚板。(但唐織ニても。唐織。)風折(紫紐)。

(一六)

大口。扇子色入。連二人(或ハ三人)、出立同前。太刀持有。始大夫中入し、次第・名乗・道行。但連に立向所五尺斗。尤【本】(半)着也。廻賦有。連、中脇也。「いかに誰か有」と太刀持に向。太刀持、手を下ケ、答済、正面角掛る。太刀持、膝立直し、太鼓座の前に行。狂言呼出し、云云済て、左へ踏廻り、本の所に来。中腰にて手を下ケ、「班女の御事」と云。脇答云云有。太刀持、請済て、正面ニ向。「急間」と言。「皆々供仕候へ」と次の連に会釈。連手を下ケ請、畢て座に行。床机に掛る。太刀持ハ二番目也。連の次に可行。太刀持の心得前に有。尤角掛、大夫出。「猶同じ世と」の返しに立、沓足出、してにむかい問答。「なつはつる扇」と角掛、下ニ居。大夫会釈油断あるべからず。「形見の扇子より」と脇初めて大夫を見。返しに披き、謡済、「いかに誰か有」と言。太刀持脇の方に向、手を下答畢て立。大夫に向問答。「人に見する事あらし」と謡畢て、下ニ居。尤角掛、脇大夫に向、「身に添持し」と扇子を披き、左に持「取出は」と大夫に見する。「折節たそかれ」と正面角掛、「花をかきたる」と扇子を見。「此上わ」と畳かなめの方をむかふにし、左にて(観、太刀持)渡す。大夫の扇は右にて取。又太刀持に渡し、取替へるも有。「御らんせよ」と【平】(互)と扇を披き、左に持可見。「あふきの妻の」と大夫を見。畳ミ右に持入。尤黒ほねの扇を、大夫の方へ取に遣し、持出る(事)なり。

(99) 《鉄輪》

出立同前。始連脇男出立(同前。)名乗所、《雲雀山》の如し。尤大夫中入後也。連答拝し、階掛太鼓座の前にて案内を乞。脇幕を揚、連を見。「誰にて」と言。階掛の長短により出る所、心得有べく。「随

分てんじ替へて」と言終つて、男脇座に行、下に居。脇は太鼓座に寛く。二重舞台に三重の高棚を（置）出ス。中の棚に幣を指込ミ有。但【舞】台端真中に出。後見置畢ると、大小の前行、扇子を指と、小鼓打掛ると、膝立直し、正面に向、立行、台に上る。尤左の足より上り、下に居。尤中腰。幣を右にて出し、左の手を添へ、右の手を上に乗ケ持。右の膝の角を立、持、祝を謡。「かんとんを砕き」と左の【手にて幣の上を持】（ヲソエ右持）、右の手にて末を持。○（○祈リケリト）沓つ振り、（左右、直ニ正面ニサシ上ゲ）戴き、（「サイハイ」ト濟）始（×）の如【し】。（右ニ取）膝の角に立持。（此時尻を居エテ、夫ヨリ諷。）「大小の神祇」と中腰に成、幣を取直し（「九ヤウ」ト上ゲ、高ク「七星ト」【左右】沓つ振ル。（「祈レバ」迄也）左の方より右の方へ引廻し、【驚し】（「祈レバ」とむかふへ幣を返し、【雨ふり」と○（○「フシギヤ」ト大臣柱ノ上ヲ見。次第二○）○正面上を見、右へ見廻し、○（○幕迄）「しきりにミチ／＼」と見詰め、【御幣（も）】と幣を（正面）真中へ指。見畢て始の棚に置。左へ披き、【（身の毛）ト急ニ立】台より下り、（静ニ廻り「恐ろしや、」）笛の上へ行、下に居。後別義無し。

(100) 《大原御幸》

出立同前。但太刀を佩く。始連脇、立（鳥）帽子・狩衣（赤コン）・大口・厚板色入・扇子持。名乗所《雲雀山》男の如し。答拝済、一足引左へ披き、踏廻り、狂言呼出し云云。畢て幕より入。尤作物始より大小の前に出有。連脇入と、一聲一段にて出る。興昇二人。厚板。大口。放し髪。腰に扇子をさす。して連法王を乗せ出る。台真中端より

五尺斗手前。脇ハ太鼓座の前通り。法王ハ二尺斗さかり、正面にむかいなから一聲謡へし。連大臣二人、左右に立ならぶ。出立始の如し。（但狩衣赤地。）次第に立向ふ（○地返しに着足有。脇の次の大臣は其うち始の大臣の次に行、二列に竝ぶ。脇は正面ニ向。）さし聲謡。「岸の山吹」と右に披き、「たへ間より」と一足出。「君の御幸キ」と法王に向。中腰に成、手を卸し、「まち顔」と謡畢る。上掛は地返しに法王階掛へ行。連大臣同前也。脇ハ連の後に付行、柱より三尺斗先にて差聲謡。「君の御幸」と階掛に向、手を下ケ謡。但其間の仕方前に同し。「ふりにける」の打切にて手を上ケ、正面向居る。「一字の御堂」と角掛立、三四足出ながら左へ静に見廻し、「あら物すこ」と作物を見、「是こそ」と謡。扱案内を乞。連女笛の上より立出、問答済、法王に向、中腰にて手を下ケ、「御幸のよし」と言。「暫く此所に御座せ」と言畢て、法王脇座に行。床机にかゝる。興昇こしを取直し、太鼓座より入。尤大小のうしろに寛く。大臣も同前也。脇は地謡の前に座す。尤角掛（居）。「はや還幸」と法王に向、手を下る。法王立入、次に脇立入。して柱の本にて、法王にこし掛る。脇の次に大臣入。句当有へし。後別義なし。

(101) 《蟬丸》

出立同前。興昇式人。素袍男式人。作物始に脇座に出ス。次第例の如シ。初蟬丸・興昇出る。次に脇、太鼓座の前通り、台端ニ（出、）幽延し、立戻り、立向所九尺斗。男式人左右に立ならぶ。次第謡、地返しに名乗足有。差聲謡。「前世の戒行」と向合。「五更の雨も止む事なく」と正面に披き、「あかしくらさむ」と謡。「足弱車」と向合。

「さなきだに」と道行し、本着也。廻賦。中腰にて、「いかに申上候」と言。「おりさせ」と言畢て、作物の次に行。輿舁取替、太鼓座より入。連男は、笛の上より小鼓の前【通】迄にならふ。脇ハ大鼓のまへ三尺斗、正面向下に居。尤左へ抜き、皆く行を見、後より(行)座スと、蟬丸「いかに清貫」と言。其儘向、手を下ケ答。「いつくに捨置」と手をあげ、正面向。「去にても」と謡。「か様の叡慮」と見、手をさけ、「かゝる思ひも」言。「おぐしをおろし奉候」と言畢て立、側へ行。蟬丸地の方へ向、角帽子をきる。畢て始の座に戻り、蟬丸「是ハ何と言」と手を下げ問答。「此御有様にてハ」と手をあげ、「御衣を」と手をさける。蟬丸謡と立、太鼓座に行、笠を両手に持、始の座に下ニ居。「又雨露」と言。「同じく」と立、側へ行、笠を前に置、又太鼓座に行。杖を持、右の方をすへにし、左の方を短く持出。「又是成杖」と見立、謡ながら傍へ行。前に置。大鼓前に立もどり座す。尤会釈、居ながら問答。「行人^{リウ}征馬」と角掛、少し右へ抜き見。「ふり捨かたき」と蟬丸を見、手をさげ、「さりとてハ」と両手にてなく。「いつをかきり」と膝立直し、なきながら立。太鼓の前にて手を静に叩し、しほくとさらくと入。連男もしほくと可入。後別義なし。

(102) 《花形見》

出立同前。但太刀佩べからず。少サ刀指也。輿舁式人。大臣式人。始連(脇)男出立。《雲雀山》に同じ。箆と、ふミと、右の手に持添る。扇を指。答拜無し。階掛にて大夫に渡す。句当可有。何も《雲雀山》の如シ。大夫中入後、次第例の通。立向所ハ尺斗。後《蟬丸》に同じ。「御幸の車」と輿を見ると、謡ながら脇座へ輿行、取替、太鼓

(三)

座に寛く。王床机にかゝる。大臣次にならふ。脇は大臣の次に角掛座ス。大夫出、「玉穗の宮に着にけり」との返しに角掛立。「時しも頃は」と謡。「御幸の御先を」と壺足出る。大夫「すゝみけり」と云時見。「官人立寄」として連の側へ行。「そこのき候へ」と持たる箆を扇にて拂ふ。其儘立戻る。「いかに狂女」と見。問答。「おそろしや」の返しに座ス。会釈由断有べからず。「なき居たり」の返しに立、大夫に向、問答。「御先を拂ふ袂なれ」と角掛座ス。曲舞迄立、大夫に向、問答。「恥かしながら」と連女箆を渡す。出、受取天王の方へ三四足出、中腰にて天王に見せ、「帝ハ是を」と言。箆を下ニ置。「御玉章」と膝立直し、大夫を見、「実有難」と左へ又膝立直し、本の座に行、下ニ居。「今ハ還幸」と天王を見。手をさげ、「供奉の人々」と天王を先ニ立、後に付入。して柱より輿を掛入。後別義なし。

(103) 《草紙洗小町》

出立、(同前。但)ひとへ狩衣(也)。其外前に同じ。但少サ刀なし。狂言・太刀持出ル。名乗所大鼓右の手通。答拜し(畢て)太鼓座に寛く。大小の後口に入。太夫出、大小の前、床机にかけ、差聲謡。「哥を読はや」と言時、笛の上より出、少右へ抜き、聞居。大夫中入すると、真中の方へ出。狂言呼出し云云有。「ふこゝろへなる」と正面向、言畢て中入する。後して連あまた出。後に付出る。長絹也。尤小冊懷中す。立向、次第謡、差聲。各正面向。「角て人丸」と各座に行、下ニ居時、脇も同前。但笛の上、脇正面の方に大夫連女座ス。此間角掛居。天王謡済、「暫」と天王に向、手を下ケ、「ふる歌」と言。王謡時手をあげ、角掛、「仰如ク」と太夫に向。問答地に取と離す。「去ハ證

哥と可有」に向ひ、手を下ケ本を懷中より出、角掛、扇子下ニ置、一
つ披き、「夏ハ涼しき」と又耄つ披き、「是こそ今の」と大夫に向。
「むねにくるしき」と離す。地返、本を太夫に渡す。後構無。論義過、
少右へ披き、「能々」と言。「自害せん」と膝立直し、階掛の方へ立行。
大夫「喃喃」と向。中腰にて見、「いかに黒主」と王言時、手を下ケ
向。「宣旨を」と立。本の座に直る。後無構。大夫句当次第也。

(104) 《卷衣》

出立、(立) 烏帽子(ホウ)・狩衣(赤・緋、何色ニテモ)・厚板・
大口・扇子色入。名乗所、大鼓右の手通、答拝済、座に行、下ニ居。
して連男出、「都より卷絹」と見立。耄足出、問答。「其身の科」の打
切に、狂言呼出し、廻賦有。放し居る。大夫呼掛と見。問答。「いかに
汝」と連(男)を見。「匂ハさりせば」と大夫を見。地諷の内同前。
「神秘を御物語候へ」と言畢て、「いかに誰か有」と狂言呼、「禁めを
ゆるし候へ」と言畢て座す。居曲舞の時ハ見。立時は離す。曲舞迄太
夫を見、「さあらバ祝詞」と言。神樂を不見。留打上⁶終迄可見。又
他流にハ、始の案内を狂言にて言有。(其時は)「心得て有」とうけ、
(連) 男来を見立。問答。後別義なし。(但狩衣ツヅク時ハ長絹にても。
風折又習の形アリ。)

(105) 《小督》

出立・名乗所・答拝、同前。踏廻り、階掛、太鼓座の前通りに行、
案内を乞。大夫問答。「申上けれハ」と正面へ二・三足出。中腰にて、
手を下ケ、「此由」と言。「寮の御馬」と膝立直し、大夫を見。「給ハ

る也」と言。「頓て出るや」と立。笛の上に角掛立居。中入ニ脇も入。
後別義なし。(但少座ヨリ下り、行成りニ下居テモ。)

(106) 《富士太鼓》

出立・名乗所同前。答拝し、狂言廻賦有。座に行、下ニ居。大夫出、
狂言来、廻賦有。子方・大夫台に入。大小の前に来る頃立。謡ながら
(見)。問答。「今ハ歎くに」と、左へ踏廻り、地謡の前に行。中腰に
て、舞衣・烏申を両手に持、右へ披き、始の所に行。「是こそ」と大
夫を見。「言兼てより」の打切にて放す。尤大夫に二色(品)を渡し、
立戻り座ス。論義に見。「ミな脱捨て、我心」と放す。後別義なし。

(107) 《天鼓》

出立、名乗(所、同前)。答拝【同前也。】(過) 地謡初座の前の下
ニ居。大夫出、小謡中の打切に立、階掛太鼓座の前に行。案内を乞。
問答。「たとひ罪には」の打切に踏廻、脇座に行立、角掛。尤始脇正
面に作物台出有。謡済、大夫に向。「是ハはや内裏」と言畢て下ニ居
る。「生て有身ハ」の地返しに放す。論義可見。但大夫下ニ不居ハ、
脇も「生て有身」にて放し、下ニ居る。「うてハふしき」と作物を見
る。謡済、大夫に向、「親子のしるしにて」と言畢て、大夫の答済、
右へ披き、狂言呼出し、大夫中入する。狂言又来て廻賦有。大小掛て
立、耄足出、待謡うとふ。太鼓聲合に角掛、「水とう／＼」と謡。済
て放し下ニ居る。大夫出ると見、居ながら問答。樂不見。済と見、
「五更の一端」と離す。但上掛りにハ太鼓なし。小鼓をどり打て謡出
ス。後別義なし。(間廻賦、別ニ習の有也。)

(108) 《二人静》

出立、風折〔紐紙捻〕・狩衣〔寄色ハ黄浅黄〕・小格子・大口・腰帶〔縫〕紋付・扇〔色無シ〕、名乗所同前。答過、左へ披き、右へ踏廻り、して柱より三四尺斗先に行、幕の方を見、廻賦有。座に行、下二居。連女出、「若菜を」と言時見立。耆足出、問答。「言語同断」と角掛。「やあいかに」と向。「ふしきの事なり」と謡ながら左へ【披き】踏廻り、地謡のかみに行。長絹を両手にて持、右へ披き、角掛、はじめの座に行。「さらば是を着て」と女に向ひ、「とくく」とあゆみ寄、渡し、立戻り。尤座す。物着落見。問答有。「ミよしの」と放す。「思ひ返せば」より切迄可見。後別義なし。

(109) 《住吉詣》

出立、名乗所同前。答拜過、「いかに誰か有」と狂言呼出し、廻賦少し有。太鼓座に行、寛く。源氏出、云云。畢て、「惟光いかに菊園」と云時、左へ披き立出、太鼓の前通り三四尺斗。して柱【の方】より出、下二居。「是に」と言。「心得申候」と膝立直し、太鼓座に行、幣を持出、始の所より三四尺斗も又先に、下二居。幣を右に持。但幣のさばき《鉄輪》の如シ。「祝言を申けり」と一ツふり、右に幣を持、「敬白」と云。「皆令満足」と又一つふり、戴き、「きし方の」と立、太鼓座に行く。【下二居る。】(幣を捨、扇を持、仕手連の竝ひたる次ニ下二居る。)[よろこひの御盃]と酌する時、扇子披き受る。後無構。但連の後より入。「金剛掛にては習有。連大臣二人・四人出ル。○但三番目の時は置鼓。尤《翁》無の時ハ置鼓ナシ。三番目の時は、名乗所真中少し右。]

(三)

(110) 《羽衣》〔初出脇座。幽延し、台端ヨリ一尺ウチノコト。扇子、金目ヲ出ヌヨヲ。〕

出立、放し髪。段のしめ。水衣着流し〔但かた上ル〕。扇子色なし、腰帶に指。腰帶〔縫紋〕。但大口きる事も有。一日の晴の時、釣竿右にかたぐ〔但釣糸有。しろ。〕。連脇式人同前。〔但無地のしめ・水衣なり。〕始めに作物に長絹を掛、台端真中に有。一聲一段にて出〔但越アリ〕。立向所九尺斗。台端にて幽延し、立戻り向合。「浪路かな」と謡のうちに名乗足。竿を前に卸し、両手にて持。(チ・ヨリ高クナラヌヨヲ)〔但左の方少し上ル。〕「万里の高山」と立廻りながら竿を披き、連に向、道行常の如ク。「釣人多き小舟かな」と連と入違ひ、(諷イツハイ位ニ)太鼓座に行、(頭ヨリ)竿を捨。扇子を持、正面に出(連脇へ行。地の方へ向、下二居。竿を下二置、扇ひらき、脇正面ニ直ス也。〕。して柱方(名乗座ヨリ二三尺)五・六尺斗出。差ことは謡。「思わぬ所に」と作物を見。(是成松)ト二足斗出、一寸留る心持斗ニて、直ニ〇「タチヨリ」トツメル。【〇「衣かゝれり」と】作物の前に寄、「いか様取て」と両手にて取、後へ引ニ一・三足。「家の宝」と脇座に行。太夫呼掛と向。(ヲソクワ正面ニ向居ル。〕問答。(心ナキ)ト一足出。「かよふまじとて」と(戻リテ)、正面の方へ【耆足出。】(向。)(「衣をかへさねば」と向合。)[あがらんとすれば]と向。(「天の羽衣取りかくし」と右ヲはづし左にニかけ耆足出。【以下約八字分薄判読不可】)初同打切に放す。「そらに吹迄」と向、問答。「あらはづかしや」(「さらハと」と大夫の側にあゆみ寄、長絹を渡す。(耆足引。))大夫下二居。請取時は、脇も下二居渡す。(シテ踏廻ヲ見テ、耆足出、踏廻り)立戻り座す。物着放し、「乙女ハ衣」

と見、居ながら〇(〇問答)。「あづま遊び」の地返しに放す。(サシ見。曲放シ)。「実雪を〇(〇廻らす)」見。舞、序の内見。後放し、五段目地頭に見る。終迄別義なし。

(111) 《吉野静》

出立同前。但掛素袍。大口。少サ刀指。右に笠提持出ル。尤扇色なし持添。名乗所、大鼓右の手通り。答拝し、左りへ披き、右に踏廻り、太鼓座に行、寛く。狂言出、大小の前九尺斗。先ニ左右ニ居云云有。句当有べし。脇笠を着、狂言の真中に行、安座ス。狂言と廻賦。問答し、「暫」と右に向ながら、笠とりながら立。壺足出、「十二騎」と言。「か様に申せば」と正面に披、「此上ハ」と左の方狂言に会釈。「よしなき申事」と又正面に披き、「後のとがめ」と右に会釈。「お暇申」と左りにも会釈。脇座に行、下に居。「但習アリ」大夫出ると笠を着、太夫に向立。壺足出、問答。「衆徒もいきとをり」と角掛ながら見廻、下に居、笠をとる。会釈由断有べからず。「大方舞の」と見終迄。但他流には中人前有。出立、法被・厚板・色なし・放し髪・笠・太刀佩・【弓矢持】(扇持)。次第にて出。尤始太夫脇座に出居。常のひとり脇の如く、太鼓座前通り幽延し、大鼓右の膝をあて、次第可謠。名乗足の内に笠をぬき、答拝し、「直ニや是に」【としてを見】(「御座候ハ、静御前にて御入候か。」としての居座を見、諷ふ。)大夫謡と下ニ居、問答。正面角掛向、「あらふしきや」と言。「何事にて」と立。柱5三尺斗。脇正面の方を見、「や何と申そ。」と一二足出。「具鏡と申すか」と言畢て、立戻り、「去ながらいかにきこしめされ」と言ながら、下ニ居。「か様に心ハ」と正面に向。「よしのがれじ」と太夫に向。

「思ひ切つ、忠信」の打切にてつと立、すらく中入す。後の出立、掛素袍、始の如く。狂言出、大小の前に居る。笠着、すらく立出、どつかと下ニ居。後別義なし。(但喜多流は右の通り。金春は又あふきに違ふなり。)(橋掛長キニワ、口傳有。ケ様なる事流儀ニなきはせぬ事也。此まへハ春藤ニ有也。有方へさすへし。是に習あらなん。)

(112) 《放下僧》

出立同前。笠着、次第にて出。尤太夫中入後、常の獨脇の如く、名乗足の内、笠脱き、狂言・太刀持出る。答拝過、狂言云云済、座に行、下ニ居。右の方に笠を置。《雨月》の如し。太夫出、狂言来り、廻賦有べし。(笠を着ながら。尤大夫出る前ニ、狂言来り廻賦有へし。)扇を披き、左に持、顔にあて、脇正面に向立、壺足出、大夫謡と見。問答。「扱今壺人」として連を見。「お僧の道具」と大夫に向。「引ぬ弓はなさぬ矢にて」と離す。謡過、狂言詞有。扇子を畳ながら、「やあ／＼船へは」と言。扇を指(放し居る。)大夫【に向ク。】(「又来る」と見。)問答。「切て三段」と笠を向へ打付、右の足を踏込、少サ刀に手を掛る。謡過、狂言詞有。平身に直し、「猶々禅法」と云。下ニ居、太夫立と離す。羯鼓過ると笠を取、座に置。(口傳)膝替直し、笛の上より切戸に入。後別義なし。

(113) 《柏崎》

出立、次第・名乗同前。道行別義なし。「可習。」尤守袋を袷に掛、文を懷中す。着廻賦。笠脱、謡「あらあさましや」と正面真中を見。「やかて案内」と踏廻り、太鼓の前【通り】に行、階掛幕を見謡。「そ

れく御申し」と左へ披き居る。「此方へまいれや」と太夫に向ながら笠を捨、階掛五六尺斗入。中腰にて手を下ケ、問答。「遁世とハ」と扇を披き、左に持、守袋をのせ、又文を出し、乗せ、「持て参りて候」と太夫の側へ行、中腰にて渡す。「但言合有べく。」(観世ハ守・文ヲ兩度ニ渡ス也。)立戻り、始の座に手を下ケ居る。「形見を見るからに」と手を上ケ、してを見。左右にてしほりながら笛の上より少し上りて座ス。尤角掛、「思ふ心の」と太夫に向さす時、手を下ケ、太夫離すと脇も離ス。角掛謡済と立入(也)。後僧連、着流し。扇は差。子方を先に立出。名乗所、太鼓前通り柱より三尺斗。「又是に」と子形を見。尤子方ハ真中通り、大小より六七尺(斗)先。「又此程」と正面に放し、答拝済、子に会釈、脇座に行。僧も次に座ス。太夫出、「妻を引導」と見、立言足出、問答。「頼もしや」の返しに放し座ス。会釈由断有べからず。「喃く如来へ」と可見。色笛より放す。「今ハ何をか」と見。「是こそ御子」と子をさそひ、立て老足出。子ハ立也。連ハ中腰也。【下ニ居ル。】太夫謡と手を放し、後へ引、下に居。切迄会釈。後別義なし。但上掛は中人前《清恒》の如ク脇座に太夫居る。笛座の上成。

(114) 《清恒》

出立・次第・名乗・道行、同前。但半着也。廻賦済、踏廻り、階掛に行、台を見、案内を乞。「御申候へ」と右へ披き、「此方へ参れ」と向。「や。」と笠を捨、連女を見て、太鼓の前三尺斗に中腰にて手を下け、○(○)居ル。「さん候面目もなき」ト顔ヲ上、「御らん候へ」と又手ヲつき、「さん候、つくしへ」ト顔ヲ上、「給ひて【候】」ト手を下

ケ、「はかなかりける【四字分薄判読不可】」、顔上テ正面ニ向。)問答。初同打切に手を上ケ、正面に披き居。「今ハ誰をか」と扇子を披き、守袋をのせ、「名をも隠さず」と向。手下、謡。尤守袋斗也(但《柏崎》と一日二番の時、可口伝有。」「是迄持て」と云、連女の側に行渡す。言合可有。左へ披き、笛の上に行、角掛座ス。「世の中」と謡時も無構。会釈なし。切迄畢て、連女の次に入。後別義無。

(115) 《望月》

出立・次第・名乗、同前。(但、文・守ナシ。)答拝し、左へ披き、狂言呼ながら踏廻り、廻賦有。「名字ばし申候な」と言畢テ、正面に向。「急候間」と言。「やどを取候へ」と言畢て、狂言と入替り、階掛に行、正面をうけ居。狂言来、「かうく」と言。答て脇座に行、下ニ居。笠は右に置き、放す。狂言来ると見。廻賦(言)、轉に放す。「いさ、うとふ。」と云時可見。(本文ニ習)狂言の詞の内見。廻賦、言畢て放す。大夫出ると見。(京掛り葛鼓済ト笛座ヨリ入ル。後ノ掛合無之ヨシ。)三段目に扇を左に持、身を右へ少披き、扇を額ひに当て眠る。(眠る所、可有口傳。)獅子済、小謡有。「手ごめにしたり」と起き見、「抑これハ」と言。尤子方後ろに來らば振返り可見。「亭主と見へし」と大夫を見言。「あら物くし。」と立あかるを、「引すゆる。」と下ニ居。「振とも」と左の手をさし、「切ども」と右の手にてうつ也。「此年月」と笛の上より切戸に入。笠の置所言合可有。前日ニ何ぞ句当かん要也。(但多ク口伝有。上掛は階掛にて次第・名乗等謡。下掛ニても。)

(116) 《烏帽子折》

出立同前。但連彦人。素袍上下・少サ刀也。立所六尺斗。名乗足のうちに笠脱。答拜過、「いかに吉六」と連に向。(連)「頓て」と言畢て脇座に行。子方呼掛ると立帰り見。問答。「則笠をまいらす」と子の側に行、両手にて渡す。わたし様言合すへし。先はうちを下二して渡す。其儘立戻り、立居る。「駒もとゝろ」と角掛、一足出。「勢田の長橋」と舞台を大きに廻り、「鏡の宿」と太鼓座より大小の後ろへ入。「旅人と伴い」と笛の上より出、脇座の方へ行。「赤坂の宿」と太鼓の方へ着、つき足有。廻賦済、「いかに吉六」と向。但連は常の如く、始の次第立向【候】(し)所に居る也。連請ると角掛居。連は太鼓座の前へに行、階掛を見、呼出し、狂言と云云済、本の所に来、下二居。「かうく御通」と云畢て、座に行、下二居る。連も同前。狂言来、云云済(時)、子来、問答。「夕へも過て」の打切に笛の上より切戸に入。連も同前。後別義なし。

(117) 《雲林院》

出立・次第・名乗、同前。連も同じ。但式人立向所九尺斗。本着也。連は返しに座へ行。脇ハ着足有。差聲謡。「木陰に立寄」と静に座へ行。「花をおれば」ニ笠ヲ捨ル時、一寸角カケ、直ニ〇〇正面に向。太夫出、「去ハこそ人の」と見べく語。「我いとけなかりし」と角掛、「余りにあらた」と会釈。「おしむもかふも」と放す。(但口傳アリ。)(次に語、始の如し。)(「夕への雲の一ト霞」と下二居る。廻賦例の如。大小かゝると待謡、居ながら謡。後太夫出、台に入と見。曲舞不見。「おもい出たり」と見。舞放し、「夜遊」と見。切迄後別義なし。

(118) 《項羽》

出立同前。少サ刀無之。扇子後ろに指。尤笠なし。連式人、竹に草花をはさみ、かたけて出る。竹の長サ、草を挟みたる所を除き、後中指の先より耳のきわまでにくらぶ。立向所九尺。名乗《羽衣》の如シ。尤半着也。廻賦等。連の答済、座に行下二居。草【前に置】(本文【約六字分薄判読不可】へに草花を置。)(前二置。)(但)草の先うちにし、持方は右也。大夫出、「秋毎に」と草花をかたげ立、忝足出、問答。連も同じ。「更は上の瀬」と正面に向(角掛)、一足出。連も同前。「乗おくれじ」と太夫の方へ二三足出。「とく乗給へ」と舟に乗。(舟無時は乗足ニ及不申由。)(「露かりこめて」の打切にても乗。(又)脇斗も乗。太夫句当次第也。乗と草花を前に置。後ろより大夫の見るよふに置。尤此時ハ脇斗、草の先を向ニして可置。「舟が着て候」と云畢て、草花をかたげ、舟より揚り、脇座二行。太夫「舟ちん」と云と立戻り、問答。「いつれにてもあれ」と大夫の側に行。大夫花を一本抜取と、忝足引、問答。「御物語候へ」と云畢て、座に戻り、下二居。花うしろに置、扇を抜持、中人ニ離ス。廻賦・待謡同前。但立て謡。太鼓聲合【に】(と)「一切有情」と角掛、合掌し、云畢て放し、下二居。後構なし。尤連女、脇の上に可来。心得有べく。後別義なし。

(119) 《安宅》(梨子打・白鉢巻・直垂上下もあり)

出立、段のしめ・素袍上下・少サ刀・鎮目扇。名乗所、太鼓前通り、柱と三四尺斗出。名乗足二足。答拜し、左へ披き、踏廻りながら、狂言呼出し、廻賦有。脇座の柱と外二座すべし。大夫出、狂言云云有。放し立、三足程出向ながら、「喃く山伏」と云。「頼朝・義経」と角

掛、「去間此所」と向。「コトニ是ハ」と左を踏込、次に右を出し、大夫の前^ら階掛を見。「大勢と云老人も通し」と身を直す。「夫山伏」と云時放し居。「近頃殊勝」と見。「夫つらく」と、静ニ連の後ろ、左の方に三四足出、角掛のぞく心持有。「関の人々」と正面へ放し、「きもをけし」と脇座に行。謡済、大夫に向。「御通り候へ」と云、下ニ居。狂言来り「判官殿」と太刀を側へ持来る。右のかたをぬきながら、「心得て有」と云。太刀を持、子方台ニ入と立、謡。四五足出、「とまれとこそ」と左へ少しとる。「是ハ此方より」と太夫に向。「旁ハ何故」と太刀に手をかくる。謡済、手を放し、「御通候え」と言。【入替り、太鼓座より】(笛の上ヨリ)、大小の後ろに入、肩^{かた}を入。「せめられうもる」と太鼓座より階掛老の松の本に出。謡済、「いかに誰か有」と狂言を呼出し、云云有。但、太鼓【座の】(幕の)方に向言。狂言案内の内放し、来ると見、(入蓮)台に入と太夫立向時、廻賦云。座に行、下ニ居る。酌する時、扇披き、廻賦有。但大夫つがずとも披くべく。舞不見。過ると見。「暇申て」と放す。後別義なし。

(120) 《東岸居士》

出立・名乗所、同前。但柱より二三尺斗出。答拜し、踏廻り、太鼓座に行、狂言呼出し、廻賦済、座ニ行、下ニ居。大夫台ニ入と見。【嵐かな】と立。老足出、問答。「御法の舟」の返しに下ニ居。舞不見。曲舞済と居ながら見。問答。太夫寛き、放し、鼓^カ付出ると(見)立。老足出、角掛、「所は名におふ」と言。「打連行や」と見。「百千鳥」と放し、下ニ居。但し句当次第也。羯鼓済と切迄見る。後別義無。

(121) 《唐船》

出立・名乗所、同前。答拜済、左へ披き、踏廻り、狂言呼出し、云云過、座に行、下ニ居。して連出、狂言来、廻賦済、して連台に入と立。老足出、問答済、狂言廻賦有。太夫出、舞台に入と立。老足出、問答。「船を見候へ」と脇正面に二足程出、階掛を見、「対面候へ」と太夫に向、云畢て座に帰り【下ニ居る。】(本文ニ座ス。「いやく」と向ながら立。老足出、「汝等ハ」と子方を見。「時刻」と太夫を見。地にとると放し座ス。「此上は暇」と向、「当社八幡」と角掛。「偽り更に」と向。「暇申て」と放す。後別義なし。

(122) 《竹雪》

出立・名乗所、同前。但始作物台端真中に出有。「惣して某」と右へ披き、「又四五日佛詣」と直し、答拜し、左へ踏廻り、太鼓座に行、階掛を見。狂言呼出し云云済、入替り中入す。尤表の方を通る。中入後「よべども呼へども」のあたりより出。「但階掛長短可心得。」一の松の本にて正面受、「佛詣」と謡。「あらふしきや」と台の方を見、「あら心もとなや」とすらくと台に入。大夫を見、「去ハこそ」と云。「只返すく」と大小の前に行、太夫を見、「理りや面目」と、両手にてしほりながら、中腰に成、「二人の親」の打切に、手をおろし、「虚空に聲有て」と作物の上を高く見ながら立。「月若活返り」と子方を見、二足斗出。「角て」と打切に子をつれ入。又太夫子を連入時は、後【5】(ニ)つき、柱^ら三尺斗先迄行見送り、「(二世)安楽」と正面に披き合掌し、返しに放す。拍子式つ踏ミ入ル。(口伝アリ。)

(123) 《自然居士》(名乗斗ニて中入もする事有也。後は「身の代衣」より出るなり。)(京掛り、初同テ出テ、名乗ナリ。)

出立・名乗所同前。「承り候へば」と右へ披。「若左様の」と直し、答拝済、座に行、下ニ居る。連ハ階掛に中腰にて、脇座する時に行座ス。太夫(出)、無構。「数の聴衆」と角掛立。右へ見廻し、子方を見、「されはこそ」と云。連も立、角掛居る。「引立て来り候へ。」と扇を差。連同前。脇より先へ行、子方を左の方、中腰にて子の左の肩と手を取、「たてとこそ。」と引立る。脇ハ連の後に付行。連引立行を後ニ静に行、狂言云云。二度目の「用が有」と云時、ふりかへり、少サ刀に手をかくる。ニ云済、手を放し、座に行。子方は脇の上に【墨消二字分判読不可】置く。次に脇下ニ居る。連ハ子方を置、左へ居ながら披き、本の座に行、下ニ居る。「けふの説法是迄也。」と左へ披き、地の方に向、右の肩をぬき、連も同前。「身を捨人を」と左に竿を持、正面向立。右の足ヲ踏出し、右の手を竿に掛、「今出て」と謡。連も同前(也)。太夫「喃く其船」と向。尤右の手をはなす。「渡りの船の御用ならバ」と本の如く正面に向、竿に右の手を掛ル。「扱此船」と手を放し、太夫に向、問答。何も連同前。「是も汝か科ぞ」と子方を見、「櫓權カキを持て」と子の後ろを二ツ打。「習口傳アリ。」(竿ニて打モアリ。又扇ニて竿を二ツ打ツ。此方本式也よし。)(「何しにむなし」と角掛謡。「是ハ船路の」と太夫に向、問答。「か様の者を」と角掛、「大法にて」と向。連謡時太夫に向居る。但脇の放す時は離すべし。「とに角に此自然居士」と連に向、「かう渡り候へ」と棹を捨、(はつたニ当テ捨ル。「えて候。」ニ当テ捨ル。竿の後ヲ□下ニ付テ□□ヲ後ニ渡す事。)(大小の前行、左へ踏廻り、連に向合、下ニ居。連も此

心得也。「扱何と有へき。」と言ながら肩を入る。連手傳ふべし。ニ云云扇子を持、右へ披。して柱五・六尺斗出。してを見、「いかに居士」と言。太夫立、顔を見合(ス)と、「船頭殿」と太夫言。「いやく」と言ながら座に行。(表ヲ通ル。)連ハ始の座に行、下ニ居。尤肩入。脇立と同じく立、行べく。脇ハ連の次、少シ間を明(ケ)て行。太夫に向、問答。「折節是に」と左へ披、踏廻り、笛の上に烏帽子出し有を中腰にて取持、左右へ披ながら踏廻り、太夫に向。「是を召」と言ながら側に行、中腰にて、左の膝に烏帽子を掛、うしろを少し折、太夫にきせる。紐ハ太夫結ふべく。「何のつれなふ」と言ながら立。連の次に座ス。(但烏帽子太夫に渡し、後へ引居る事も。言合次第。)角掛居る。舞済ミ、居ながら問答。曲舞不見。謡畢て太夫に向立。壺足出、問答。「彼佛の」と角掛、下ニ居。「今ハたすけて」と会釈(立。子方の次ニ来ル。連は次ニ下ル也。)後無構。放居ル。但上掛は「身のしろ衣」の返しより出、一松にて名乗、直ニ子方を見、「去ハこそ」と言。後別義なし。念入言合べく。尤連一人に可限。掛合違也。

(124) 《俊寛》

出立・名乗所、同前。答拝済、右へ披き、踏廻り、太鼓座タカ大小のうしろに入。(但金剛流の時分ハ、狂言呼出し、廻賦言、中入ス。)(「物思ふ時しも」と太鼓座より出。柱先三四尺斗にて、「いかに此嶋」と云。(但し、金剛流の時は、作物を出し、一聲にて出。越打切て出。うしろの方ニ乗。尤同の間、正面ニ向、一聲謡。せりふもあり。)(楽長連太夫に向、問答。別義なし。「是く御戴き候へ。」と懷中の文を取出し、左に持、連へ渡す。尤側に行。中腰也。渡おわつて膝立直し、

始の所にかへり、座ス。正面向、「いや／＼それかし」と太夫に向。
 「此程ハ三人」と立、太鼓座に寛く。曲舞留に舟に乘ル。舟始の所に
 有。尤扇指。(但一聲無時は舟を此時出ス。脇正面、又は階掛一の松
 ノ本。脇竿を持乗。)謡済、「時刻うつりて」と言。して連ハ先にのる。
 太夫を呵る時は見て謡。「櫓櫓を振上」と棹を振揚、ひとへ身に見。
 「さすが命」と竿を卸し、「舟人トモツナ」と中腰に成、竿を下ニ置き、
 両手にておしきる風情をして、竿を取、幕の方へ向立。右の手を竿に
 掛、押出スと謡。其儘にて問答。尤舟脇正面に出る時も此心得也。手
 を放し、正面うけ、論義済「(【迄う】まてよ)／＼」と、して連よ
 り段々下り入。脇は棹を持たながら入。(口伝多し。習ひあり。)句当可
 念入。

(125) 《籠太鼓》

出立・名乗(所)、同前。始作物大小の前に出有。答拜済、踏廻り、
 狂言呼出し、廻賦済、座に行、下ニ居。狂言来云云有。太夫出謡と見。
 太夫台真中に来り、下ニ居ると立、一足出、問答。「今の女お」の打
 切にて廻賦有。難し立居。謡済、狂言太刀に手を掛ると「やあく／＼女
 に」と言畢て立居。尤離す。太夫謡済、狂言来云云過、作物の方へ
 (一・二)三足出、同答。「やさしき女の」と扇を指、作物【の側へ
 行】(に寄)。「籠の戸を開き」と立ながら両手にてひらき、太夫を見、
 手を放し、「セイロウ」ト静ニ二三足跡ハ引テモ。「むざんや我妻
 (夫)」といふ時、左へ立廻り、座に行、立居る。「猶も偽と語【虫損
 一字判読不可】」ニ居る。後の問答下ニて、太夫江向、謡。「なつかし
 の此籠や」と、謡過て立、一足出、太夫へ向。「弓矢八幡も」と謡。

「頓て時【虫損一字判読不可】」と下ニ居る。はづし、後別義なし。

(126) 《景清》

出(立)同前。但無地のしめ・少サ刀なし。始作物大小の前に出有。
 連脇、段のしめ・素袍(上下・少刀)。(但太夫より【墨消二字分不
 明】出ルもアリ。言合次第。)連女先に出、次第にて出。立向所五六
 尺斗。半着也。廻賦済、座に行、下ニ居。連女立と同じく立。「いか
 に此わらや」と作物を見、一足出、問答。「猶是⁵奥へ」と連女に向
 云、下ニ居。(但此時太鼓座ニ行モ有。喜多流、太コザニクツログナ
 リ。)謡済、階掛へ行。脇を呼出ス。脇謡ながら出。幕より六七尺斗。
 (但、階掛長短ニヨル)。「あらふしき」と連女を見。「是ハ何と申たる」
 と男へ向、問答。「景清は両眼」と正面に離。「我等こときの」と男に
 向。「此方へ渡り候へ」と連女・男共ニ座ニ行、下ニ居。脇は後⁵作
 物右の角より三尺程先に立、作物を見、「いかに」と言。壹足出、「悪
 七兵衛」と云。「物かたりはしめて」と太夫作物⁵出ると下ニ居。(但
 「二門の舟の内」の打切に、男の次に行、下ニ居ル)。「語て聞セ」と
 言畢て立、男の次に行、座ス。切迄見。男ハ連女と同じく入。後別義
 なし。

(127) 《百萬》

出立同前。但段のしめ・少サ刀指。先へ子方、次に脇出る。次第の
 如し。立向所九尺斗。名乗、「又是に」と子見。「此頃は嵯峨」と直し、
 答拜過、一足引。子に向、「かう御座」と言畢て、左へ披、一・式足
 出、踏廻り、太鼓座の前に行、階掛を見、狂言呼出し云云済、座に行、

下二居。尤子ハ「かう御座候へ」と云畢て、脇座に行、下二居。脇ハ子の次ニ座ス。太夫出て後、子方「いかに申へき」と居ながら子に應答。謡過立、一足出、太夫に向、問答。「か程郡集の」と角掛る。「なとかハ廻りあわさらん」と見。「もゝや萬(の)」と下に居。「実やおもん見れば」と放し、「我か子に逢せて」と中腰にて子をさそひ立、太夫を見、「余りに見るも」と謡。「心強や」と手を放し、後へしざり、下二居。「能々是を」と放し、後別義なし。

(128) 《哥占》

出立・次第・名乗、同前。尤子方先へ立出る。立向所も同じ。答拝済、子に向、「先かう御座」と言畢て、兩人共座に行、下二居。何も《百萬》の如し。太夫出、謡。「なにハの事も問給へ」と見、廻賦。「但廻賦なきも有。」廻賦の内立、壹足出、問答。尤子も立。太夫「短冊を引て御らん候へ」と太夫の側に行、短冊を両手にて持見。「北は黄⁺」と云、手を放し、「か様に候」と云、後へ二・三足引。「又是成人も占の」と子を見。太夫謡と入替り、本の座に行、下二居。後の問答居ながら諷。轉に放す。曲舞過、太夫謡と見。其儘にて問答。「我子にうち連て」と放し、後別義なし。「但宝生流は脇なし。」

(129) 《山祖母》

出立同前。連女先に立出。次第二段。連式人出立同前。立向所九尺斗。「是に渡り候御方」と連女【**ニ**に向】(を見)。「我等御供」と直し、答拝し、踏廻り、立向、道行す。本着也。廻賦。「此所にて」と連女に会釈。「先かう御座候へ」と云。連女脇座へ行、下二居。連式人其

後に付、同前。脇は中程より右へ踏廻、太鼓の前、階掛をうけ、狂言云云済、大小の前四五尺斗出、下に居。連女と問答過、又太鼓の前に行、狂言云云済、連二人の次、少し前に座ス。「頓て御立」と云。連女【**立**】(と)脇も同じ角掛立、一足出、廻賦。「申さるゝ如ク」と狂言に向。「いまだ日ハ高き」と角掛、上を見、「扱此当りに宿ハ」と狂言に向。太夫呼掛る。狂言「宿をかせ」と云。答拝。太夫に向、問答。「さらばかうまいり候」と左へ踏廻り、始の座に戻り、下二居、問答。中入迄可見。廻賦色々(習有)狂言より掛る。云云済、大小掛ると女に向詞有。角掛居ながら待諷うたふ。後無構。会釈可心付なり。

(130) 《海人》

出立・次第同前。名乗足なし(アリ)。差聲謡。「房崎」と謡と向。中腰。連同前。四人(或ハ)二人。但脇の差聲時は下二居ず、立向所前に同じ。道行本着也。「但上掛りハ半着ナリ。」尤黄昏に及時ハ半着にもする也。廻賦。「又あれ」と右へ大きく披き、「かれをまち」と子方に会釈。子方座に行、床机に掛る。脇は末の連の後に付行、少し前に出、角掛下二居。連は子方の次に下二居る。太夫出、「世を渡る業」と見。返しに立、一足出、問答。「あの水底」と正面真中通りを見。「茹てまいらせと」太夫に向、地返しに放し、太夫○(○一寸後エ向キ、ミルメヲ後見ニ渡。二三足)出ると見る。(○「暫ク」ト言。)
「あれ成里」と脇正面角掛見。「是成嶋を」と正面を見。但太夫云合次第也。「扱其玉」と太夫に向。「やあ【**我**】(是)杜房崎」と(放し、角掛)子方を見、下二居る。太夫謡と見、子方謡時放し、○(○「い

かに海人」と太夫を見披、「海底」と放し「角て」と見。「此筆の」と太夫、子方の側へ行を見送り、中入迄可見。廻賦。太鼓の前に行、狂言呼出し、つれ来云云済、大小例の如く有て子方に向、手をつき詞有。待諷、角掛居ながら。尤地にて謡。後無構。子方の後に付入。但二段返しの時習ひ有。但廻賦習有。後別義なし。別ニ習の廻賦有。

(奥書)

天保九(一八三八)戊戌春於東都写之豊後岡藩中

大神性阿南惟英主人

付記

貴重な資料の閲覧・翻刻を御許可頂きました高安流脇方飯富雅介師に心より感謝申し上げます。本稿の作成に当たって御教示を頂きました筧鉦一師、データ入力に協力頂きました平成九年度飯塚ゼミ卒研生の中島淑恵さんに心より感謝申し上げます。なお、本稿は平成一〇年度文部省科学研究費助成奨励研究(A)「東海地域能楽資料の収集と整理」(課題番号:〇九七二〇三二六)及び平成一〇年度相山女学園大学研究助成(B)「東海地域能楽資料の収集と整理―画像資料を中心に―」による成果の一部となります。